



TITLE:

<批評・紹介>清代鹽政の研究 佐
伯富著

AUTHOR(S):

波多野, 善大

CITATION:

波多野, 善大. <批評・紹介>清代鹽政の研究 佐伯富著. 東洋史研究
1957, 15(4): 578-582

ISSUE DATE:

1957-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/145893>

RIGHT:

批評・紹介

清代鹽政の研究

佐伯 富 著

一九五六年十月 東洋史研究叢刊之二 東洋史研究會
本文 四〇〇頁 索引 二九頁 定價 千百圓

○

がんらい、專賣制度というものは、生産または流通を國家あるいはそれに類似した權力によつて獨占するものである。專賣には、財政的な目的をもつものと、福祉的な目的をもつものと二つの場合がある。すなわち、前者は、國家の財源にしようとするものであり、後者は國民の生活上あるいは健康上の理由から、國家によつて國民各自の必要を保證しようとするものである。通常、財政的目的をもつ專賣品は、自由市場價格より高價であり、福祉的目的をもつ專賣品は、自由市場價格より低廉であるのは當然である。この場合、爲政者として、もつとも注意を要することは、福祉的目的をもつ專賣の對象になるべきものを、財政的目的をもつ專賣の對象にしてはならない、ということである。すなわち、國民の生活上または健康上に缺くべからざるものを、財政的專賣の對象にしてはならないのである。

ところが、中國では、古くから、福祉的な目的の專賣の對象になるべき鹽が、財政的目的の專賣になつてきたのである。中國で、古來專賣の對象になつたものは、鹽のほか、鐵、酒、茶、明礬などが

あるが、これらの物品を、財政的目的をもつ專賣の對象にしたのはともかくとして、鹽のような國民の生活・健康に缺くべからざるものを、專制權力を維持する財政上の必要から、專賣の對象にしたことは、注目すべきことといわねばならぬ。もちろん、鹽の專賣といつても、清代の場合は、現在の日本での煙草の專賣とは異つて、むしろ酒のように、高い消費税（鹽課）をかけるものであつたといつてよい。ただ、これが、脱税を防止したり摘發したりするこまかい制度とか、その流通過程に關係する特許商人、およびその販賣地域の限定とかいつた特殊な制度の下で行われただけなのである。

ところで、このような制度によつて徴収される鹽税（鹽課）は、清朝政府の財政上において、どれ程の重要性をもつていたものであろうか。いま、二、三の統計をひろつてみると、つぎのごとくである。

すなわち、現銀収入のみにしてみると、だいたいその一割前後を占めていたのであり、初期において八・五％だつたものが、時代の下るにしたがつて増加し、乾隆の一三・四％を最高として、以後また低下している。大ざつばな言い方をすれば、時代のくだるにしたがつて増加する清朝政府の支出をまかなうために、漸次鹽税が増徴されたが、乾隆以後はその増徴が困難になつたのみでなく、むしろ減少した。しかし、五港開港以後は、海關収入が新しい財源となり、それが北京條約以後において、外國人總稅務司の下に整頓されて増大し、また、釐金が太平天國後の新財源に加わつたために、鹽税の重要性が低下した、ということができる。

清朝政府にとつて、地丁収入についてこのような重要性を占めていた鹽税の中においても、その大體半額前後を負擔していたのが兩

現銀収入
中における
鹽課
%8.5

順治9年 (1652) *	地丁等 鹽課 關稅	2126萬兩餘 212 " 160 "	
康熙初年 *	地丁等 鹽課 關稅	2634 " 276 " 200 "	8.9
乾隆31年 (1766) *	地丁 耗羨 鹽捐 捐輸 落地 雜稅	2991 " 300 " 574 " 300 " 128 "	13.4
道光21年 (1841) **	地丁 鹽課 關稅	2943 " 495 " 420 "	12.8
光緒19年 (1893) ***	地丁 賦折 耗羨 鹽課 常關 釐金 海關	2332 " 1732 " 444 " 303 " 767 " 284 " 1427 " 1680 "	9.2

* 清史稿(卷三三)會計、漕糧を除く。
** Eakins, J., *The Revenue and Taxation of the Chinese Empire*, Shanghai 1903, p. 11. (光緒會計録による)。
*** 石渠餘記卷三、實徵數を

准であるから、兩淮鹽が清朝の財政に對してもつていた地位も自ら想像されるのである。

○

ところで、この鹽稅の徵收機構とそれをめぐる諸問題の究明は、中國史の研究上において必要かくべからざるものではあるが、その複雑さのために、誰でもおいそれと手がけられるようなものではない。先に、明代についての研究が藤井 宏、中山八郎の諸氏によつて遂行されたが、このたび、清代のそれについて、佐伯 富氏が、「清代鹽政の研究」として、清代の兩淮鹽政についての、平素の精力的な緻密な研究成果を公刊されたことは、學界のために、よろこ

びにたえないところである。

わたくしは、平素、中國史の研究において、實證的な研究の必要を痛感している一人である。大上段にふりかぶつたような言い方で恐縮だが、歴史研究は、どこまでも歸納的でなければならぬ。演繹的であつてはならぬ。實證された事實から、歸納的に理論を導きだすべきで、理論から演繹的に理論を導き出すような方法をとるべきではない、と思う。もちろん、歴史研究者の中には、實證的な研究と、その實證にもとづいた理論的構成との兩方をやることのできる有能な人も多いが、わたくしをはじめとして、その何れにおいてもあまり有能でないが、しかし、研究者として立つていきたいと念願している人も、また、かなりあるだろう。こういうものは、これはわたくし自身に言いさすことであるが、まず實證的研究に専心したいと思うのである。今さららしくこんなことをいうのは、佐伯氏の緻密な研究を見せられて、平素の感懷を一層ふかくしたからにはかならない。

さて、本書は、中國の製鹽場の代表であり、清朝政府の財政上において、上にのべたような重要性をもつ兩淮の鹽稅徵收制度についての、緻密で精力的な綜合的實證研究である。その内容を大まかにいえば、(一)中國史上における鹽の問題の重要性(第一章)、(二)兩淮の製鹽場および製鹽の實態と製鹽業者の階級分化(第二章)、(三)兩淮鹽の販賣地域(行鹽地)の諸問題、とくに、他の製鹽場の鹽の販賣地域との間の、販賣地域爭奪に關する問題の究明(第三章)、(四)正規の鹽稅を納めない鹽(私鹽)の販賣が行われるようになるいろいろな経路についての具體的な事實の究明(第四章)、(五)正規の稅を納めた公認の鹽(官鹽)の價格が騰貴するいろいろな原因につい

ての研究（第五章）、（六）（四）と因によつて公認の鹽の賣行きが悪くなるほか、國際的な原因も加わつて、販賣に従事する鹽商の營業が成立たなくなつて没落し、嘉慶から道光にかけて、舊來の鹽稅徵收制度が、その本來の機能をはたしえなくなつた諸原因の究明（第六章）、（七）この本來の機能をはたさなくなつた、舊鹽稅徵收制度の陶澍による改革の實態（第七章）、および結語（第八章）である。

それぞれの問題については、一つ一つここで紹介することはできないが、その中、興味のある二、三のものについて左に紹介することにした。

清代の鹽の制度は、要するに、國民に高い消費稅（鹽稅）のかかつた鹽をたべさせる制度であり、この制度を裏から見ると、如何にして國民に正規の稅のかからない鹽をたべさせないようにするか、という制度であつたともいえる。製鹽地で、安ければ一斤一、二文、高くても十文ぐらいで買あげた兩淮の鹽が、漢口で四、五十文、遠い奥地では八、九十文になつた（本書五五頁）というから、國民の過半数を占める貧民にとつては、大變な苦痛であつたはずである。鹽が、無くてはすまされないものであるだけに切實である。この必要を満たすものが關鹽で、値段が公認の鹽の半額である上に、品質も上等であつた（一一〇頁、その他）のであるから、關鹽が歡迎されたのもちろんである。關鹽の販賣額は、公認の鹽と同額と推定（二〇五頁）されているが、この關鹽の販賣組織がどういうものであつたか、この實體を明かにすることができれば、專制權下におけるいろいろな問題を解決する手がかりになるのである。從來、この組織が各種の秘密結社と關係がある、ということもいわれていた。

しかし、その具體的な實體は明かにされていない。

この問題について、佐伯氏の研究は興味のある具體的事實を提供している。すなわち、長蘆鹽の關鹽販賣組織の中心に「風客」と稱せられる資本主のいること（一三六―九頁）である。この風客は、公認の鹽の販運をする場所・運商の機能をかねたものであつたらしく、關鹽を買占め、漕運の船頭その他を組織して、長蘆製鹽場の關鹽を江南に販賣し、歸りには材木・紙・燒物・雜貨などを買つて天津にはこび、それを賣りはらつて關鹽をかつていたもののである。また、淮南の關鹽販賣者（鹽梟）の集團についても、いろいろな資料が集められている（一六〇―一七七頁）。これらの集團の中には、仗頭（あるいは大仗頭）・副仗頭を中心として、百餘人から數百人が結盟し、中には數十萬兩の資本を擁していたものもあつたらしい。こういう點から、秘密結社が商業資本の關の組織でもあつたらしい側面もうかがわれるのである。

もう一つは、兩淮における鹽商の隆替を、世界經濟の中で理解しようとしていることである。中國史とくに近代中國史を、世界史の一環として理解しなければならぬ必要は、わたくしも平素痛感しているが、佐伯氏は、兩淮における鹽商の隆盛と衰替を、つぎのように説明している。少し長いが、本書の中で、もつとも精彩にとんだ部分の一つだから、左に引用しよう。（かなしい原文のまま）

揚州鹽商の隆替は、清朝の國家權力の盛衰と密接な關聯があることは注意すべく、鹽商が政商たる性格を多分にもつていた當然の歸結といふべきであらう。しかし、鹽商の没落はもう少し進んで考へると、中國における貿易の盛衰、大きくいへば世界における銀の流動と重大な關係をもつていた。中國においては明の萬曆頃から清初にかけて、蘇州を中心とする揚子江の下流デルタ地方において、

絹布・綿布などの輕工業が發達した。時宛も西歐人が東方に進出した時期にあたり、これらの産物が盛んに輸出せられ、その代價として莫大な銀が中國に流入した。この銀が産業の開發に使用せられ、中國の産業界は未曾有の好景氣に恵まれた。農村の過剰人口も、蘇州地方における輕工業の労働者として吸収せられたために失業者が少く、社會は割合に平穩であつた。(二九三―四頁)……。

然るに萬曆から乾隆にわたる社會の好景氣も、乾隆時代を最後に過ぎ去つて、次の嘉慶時代には經濟界の不況が襲來した。これがために多數の失業者が社會に放出せられた。嘉慶以後、頻繁に起る叛亂は、かかる失業者が原因をなしてゐるやうである。それでは嘉慶以後における經濟界の不況は、何に起因するかといふと、それには色々の原因があるが、最も重要な原因は貿易の不振、つまり銀の國外流出にあると考へる。……中國における銀の減少は、いはば通貨の収縮を意味し、産業界に大打撃を與へた。資金が減少するので諸産業が萎靡沈滞し、ここから多數の失業者が生じた。これらの失業者は、多く私鹽や鴉片の密賣に身を投じたりしい。嘉慶から道光にかけて私鹽が盛行し、各地の鹽政が崩壞したのは、一つにはここに原因があつたやうである。一方鹽商自身においても、私鹽の跋扈により鹽が賣れず、投下資本の回収が香しからず、資金難になやむやうになつた。また先にも述べたやうに、銀の減少は當然に銀錢比價に變動を生じた。これまで大體、銀一兩制錢一十文を以て安定してゐた比價に變動を生じ、一千二百文・一千五百文となり、さらに二千文を突破し、銀價が著しく騰貴した。このことは、鹽を錢賣し、銀を以て納課する鹽商に大損害を與へた。また、先に指摘したごとく、金利も道光時代には、從來の二倍以上にはね上つてゐる。この

ことは貸借の危險が増大したこともよるが、やはり、銀の海外流出に伴ふ資金の缺少が、最も大きな原因のやうである。ともかく、銀の國外流出は、色々の面で鹽商に大きな損害を與へ、資金の枯渇を來し、遂には鹽商を没落させる最も大きな原因となつたのである。(二九五―六頁)

こうした考え方に對しては、いろいろ意見のある人もあろうが、佐伯氏が、中國の歴史現象を、世界史の中で理解しようとした努力に對しては、何人も敬意をおしまないところだと思われる。

○

本書を読みおえて、痛感することは、事實を明かにするために拂われた緻密な精力的な史料蒐集の努力であつて、怠惰な筆者にとつては、鞭撻されること多大である。その緻密な注意は、本書の校正が實によくゆきとどいてゐることによく表われてゐる。あの大冊中において、筆者の氣づいたミスプリントが二字にすぎなかつた。この事實は、史料から遠くはなれてゐるものにとつて、本書の中に豊富に引用された資料を、安心して研究の參考に供することができることの證明である。その上、本書の卷末に附けられた詳細な二九頁の索引は、先にもべた本書中の豊富な原文引用資料と相俟つて、清代鹽政辭典として利用しても、林振翰の鹽政辭典よりはるかに有益であると思われる。林振翰の鹽政辭典には記載されてない、しかも重要な鹽政上のむづかしい言葉に關する資料と解説が、たちどころに本書の中で見出されるのである。清代鹽政の研究に志すものにとつて、この點についてだけでも有難いものであると思われる。

ただ、ここですこし望蜀の言を弄することを許してもらつて、つぎのことをつけ加えておきたい。すなわち、文章中にわかりにくい

原資料の言葉がやたらに出てくるが、これは平易な日本語に改めた方が、専門外の人にも読み易くなるのではなからうか。資料の中の言葉をそのままよく使用されたのは矢野博士の著書であるが、それを読んで、いつも何だか親しみにくく感じたのである。本書のある部分、例えば陶渚の改革の内容をのべるあたり、「また預納減納・貼色貼息及び印本抵課などの弊により、庫款が混亂虧耗した」というような書きかたが至るところに續出している。こういう生の言葉を使用することは、専門家には叙述が簡便で都合がよいのであるが、専門以外のものにはわかりにくいのではないかと思われる。本書が、全く専門的な學術書として書かれたという事情もあるうが、本書のような興味があり有益な書物が、廣く中國を研究しようとする人々に讀まれることを希望するが故に、本書のこのような親しみにくい書き方が氣になるのである。現代かな使用によらず、また略字を絶対に使用しないといった著者の態度から察すると、こういう書き方も確固たる信念にもとづいたものとは思ふが、再版のときには考慮されるよう希望したい。

それから言葉尻をとらえて相すまないが、輕工業とか金融資本とかいう言葉も、まぎらわしいから、その内容と一致するように家内工業とか高利貸資本とかいうように改めた方がよいのではないかと思う。

以上何だかとりとめもないことを書いてしまつたが、速達でせめ立てられながら、大いそぎで書いたので、本書のような力作の數々の勝れた點のうち、當然とりあげなければならぬものを落したり、枝葉にわたる點をことさらにあげたりしているわけであるが、この點は、筆者の未熟さの致すところである。もともと、筆者は、本

書の紹介者としては不適當であることを充分承知しながら、編集子の下命もだしがたく、思うままを記して責をふさぐ次第である。
(二九五七・二・一五夜稿了)。

(波多野善大)

中國考古學研究

關野雄著

昭和三十一年三月 東京大學東洋文化研究所刊
本文 六六五頁・圖版 三三・索引 十六頁・
英文摘要三一頁。

昨年東京大學東洋文化研究所の關野雄氏の論文集「中國考古學研究」が刊行された。私は考古學を専攻するものではないけれども、専攻の時代が常に考古學の分野と關係をもつため、本書からいろいろ教示される點があつた。

本書は I 土器の系統 II 金屬文化の本質 III 都城と建築の調査 IV 尺度と重要單位の解明 V 藝術上の諸問題 附録の六部、各部分は數個の論說から成立している。このうち特に専攻に近い第一部及び第二部の一「殷王朝の生産的基盤」のみについて取敢えず紹介させていたたく。

第一部の中心をなす「華北先史土器の一考察」は、從來餘り注意されなかつた灰陶のもつ意義に注意し、この灰陶は中國の新石器時代に最も普遍的に見られるものであり、この灰陶の系譜を考えることによつて、黒陶の歴史的位位置を決定しようとする。中國の新石器